

# 源氏物語成立論批判

岡 一 男

本誌の編纂委員会から『源氏物語』の成立に關する最近の諸説についての批評を要請されたので、管見に入つたものについて、簡単に所感を述べる。

私自身の『源氏物語』の成立にたいする考えは、未熟だが、すでに『五十嵐力博日本古典新攷』(昭和十八年刊)所收の『源氏物語成立攷』に述べてあり、それには與謝野晶子氏・和辻哲郎氏から玉上塚彌氏にいたるまでの成立論議が對象とされてある。私の結論は要約すると、(a)『源氏物語』は紫式部の寡居時代に著手され、(b)宮仕えしてからも執筆が續けられ、寛弘五年春頃少くも正篇は完成し、續篇の「宇治十帖」も寛弘六年頃には出来ていたろうという、頗る平凡なものであるが、(a)の第一の證據は、彼女自身『紫式部日記』寛弘五年十一月の里歸りの條に、寡居時代に物語の製作に熱中し、多くの友人の手を貸りたことを言つてゐるのでわかる。《拙著『古典と作家』『紫式部私考』参照》なお、この物語の正篇の準據や引歌に彼女の良人の死んだ長保三年四月二十五日前後のものが多いのでも察しられるのである。(b)の證據としては、私は紫式部の宮仕えを寛弘二年十二月二十九日とするものだが《前掲拙稿『紫式部私考』》「宇治十帖」の「手習」に、源信

僧都をモデルにした横川の僧都が、妹の老尼とともに出て来る。ところで、彼が權少僧都に任せられたのは、寛弘元年五月二十四日で、《『大鏡裏書』『僧綱補任』》當時六十三、妹の顯西尼は十五歳であつたから、従つてこの卷は、少くもその二三年以後の執筆とするのが適當だと思われるからである。そして一方『紫式部日記』の成立の研究から、一條天皇が侍女に『源氏物語』を讀ませてお聞きになりつつ、「このひとは日本紀をこそみたるべけれ、まことに才あるべし」と仰せられたのは寛弘五年の春とわかるから、その頃『源氏物語』の大部分は完成して、數代の御宇にわたる宮廷・貴族の壯麗な私的生活史は、天皇をして『日本紀』を御聯想させ申したのであらう。その十一月一日には、當時の歌壇の最高權威の藤原公任をして、後一條天皇の御五十日の饗宴の席上、彼女を呼ぶに「若紫」を以てせしめ、この戲言が彼女の女房名の「紫」の由つて來るところとなつたのだが、この頃『源氏物語』が上下にひろく流布してゐたことがわかる。しかし、それに「宇治十帖」が含まれてゐたかどうか不明であるが、それから一週間はどして中宮の御前で冊子づくりのことがあり、紫式部が私邸からもつて來て局に隠しておいた物語の本どもを、彼女が

中宮の御前に侍している時、道長があらいらい持ち出し、中宮の御妹の尙侍研子に奉つたというが、これは恐らく「よろしうかき書へたりしは、みなひき失ひて、心もとなき名をぞ取り侍りけむかし」とあるのを見ると、彼女の自作の物語で、それも稍々巻数が多いものらしいから、「若紫」以後の巻々か「宇治十帖」であつたらしく思われる。次いで寛弘六年夏の日記に「源氏の物語、お前にあるを、殿の御覽じて」とあるのは、道長が尙侍に奉つた物語の本どもも含まれていて、少くも正篇四十帖、どうかすると五十四帖全部が完成したものととして美しく冊子に製本されて、うすたかく中宮の御前にあつたのを彼が見て、つい作者たる式部に「すきものと名に立てれば」と戯談を言つてしまつたのだから。

ただ「雲隠」以後の巻々、特に「宇治十帖」がこの時出来上つていたかどうか疑えば疑えるが、寛弘六年正月三日の條に挿まれた消息體感想文（これはこの日記起稿の七年夏秋の交の心境を記している）にも「いかに今は、こといみしはべらじ。人はといふともかくいふとも、ただ阿彌陀佛にたゆみなく經をならひ侍らん。世の厭はしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖（おん）にならんに、懈怠（おろそ）すべしと侍らず」という凛然たる言葉は、小野に出家し、もはや弟小君を以てする黨の懇ろな下山の勸告にも従わず、隔生忘却の體で佛道に専念したという「夢の浮橋」の浮舟の心境につづくように思われる。そうすると「宇治十帖」は、晩くも寛弘七年春には完結してゐたと思われるが、一方、正篇と「宇治十帖」にはかなり文體と創作態度に變化があり、賀茂眞淵のごとく兩者に相當の年代の隔りを認める學者

もあり、また、日記の既述の文について「ただだたみちに背きても、雲にのぼらぬほどの、たゆたふべきやうなはべるべかんなる。それにやすらひ侍るなり」という言葉があり、そういう心境から宇治八宮やその大姫君などの俗聖的な性格や生活を思慕する黨の物語が生まれて来たのではないかと思われる。消息體感想文のとじめ近くに「この頃反古もみなやり焼きうしなひ、雜などの屋づくりに、この暮し侍りにしうち、人のふみもはべらず、紙にわざと書かじと思ひはべるぞ、いとやつれたる」といつても、貧乏してよい紙がないというだけであり、文藝的な表現慾は「御文に、え書きつづけはべらぬことを、よきもあしきも、世にあること、身の上の愁へにても、のこらず聞えさせおかまほしう侍るぞかし」とか「ゆめにても散りはべらば、いとみじからんまたまたもおほくぞはべる」とかいう語に、はつきりとあらわれている。それに寛弘八年二月には老父の爲時が越後守に任ぜられており、經濟的にも餘裕が出来たはずであり、それから彼女は長和三年春頃まではたしかに生きていたのだから、この間に何も文藝的活動をしなかつたはずがなく、従つて「宇治十帖」の著作期をここにおいても悪くないとも考えられる。匂宮と浮舟との戀愛特にアベック外泊が、寛弘五年頃に著作されたらしい『和泉式部日記』の帥宮と和泉式部とのそれに似ていることや、彼女が晩年伊勢大輔と交換した「奥山の松には氷る雪よりも」の贈答歌の發想によく似た歌が「稚が本」にあるなどは、これを傍證するようである。かういふと、或いは『紫式部日記』寛弘五年十一月中旬頃の里居の條に「試みに物語を取りて見れども、見しやうにもお

ほえず」とあるのは、どうだと反駁されそうだが、それは紫式部の人生體驗や文藝眼が深く鋭くなつて、若い頃夢中で讀みふけたロマンティックな物語が莫迦々々しくなつただけの話であらう。

しかし、私はまだ「宇治十帖」を寛弘七年以前におくべきか、以後にすべきかについてはまだとつてゐる。これは紫式部の精神史の發展段階を究明するに重大な事なので、去年、一年の研究期間があたえられた機に、公私の書庫を訪ね、一條朝を中心とする文献を博搜したが、それを解決する緒口はついに見出しえなかつた。

處が、一方學界では『源氏物語』の内部微證を精緻に調査してこの物語の成立年代や執筆巻序を新たに考えようとする風がさかになり、幾多な獨自で尖鋭な論文が現われて來た。そして、これらに教えられるところが多いとともに、また新しい疑問の擡頭することも禁じえないので、その管見にふれたものについて寸感を述べる。敘述の次第は、一般讀者の便宜のために、『源氏物語』の巻序に従ひ、論文の發表の順、或いは學的價値の高下によらないことにする。

## 一、「桐壺」

まず、この物語の冒頭の巻たる「桐壺」を中心に「源氏成立立説論」(『日本文學教室』昭和二十六年六月號)を企てられた桑原雄氏の論考から見てゆこう。この若い學徒は「桐壺」の巻を三つの段にわけ、第一段は更衣の殊寵から若宮生誕、周圍の妬み、更衣の死まで、第二段は帝の悲嘆、第三段は源氏の生立ち、藤壺の入内、源氏の元服及び葵上との結婚が語られている。しかも、

この三段がそれぞれ描寫の上に非常な相違がある。すなわち、第一段、第三段は、事件が多く、時間の推移が急速で、長い年月のことを短篇の中に記述して、いかにも慌しい筆であるに反して、第二段は輕負命婦が故更衣を訪う箇處のすぐれた描寫や「長恨歌」の翻譯を骨子とした珍しい描寫などがあつて、直ちに他の段と同一作者の手になつたことを疑わせるというのである。なおその具體的な證據として、第一段(一首)、第三段(二首)の歌と第二段(六首)とを比較し、後者が前二者より格段にすぐれていとされている。それから、引歌の巧拙に及び、更に「桐壺」に「壺前裁」という別名がある(『奥入』)ところをみると、それは第二段に與えられた名稱で、これがもと獨立した物語で、或いは『更級日記』にいう長恨歌の物語というよるな物語の一つであつたのではないかと推定し、今の「桐壺」はその前段に帝の嘆きの理由と源氏の誕生を書き加え、更に後の巻々に結びつけるために後段の源氏の生立ちを書き加えたものだとしている。

この考えで取るべき處は、第二段の壺前裁が、この巻の中心主題であり、それは「長恨歌」の翻譯でもあるとした點にある。私は舊説に従つて『源氏物語』の起筆を紫式部の冥居中とするからこの説は非常に示唆的である。彼女は夫宜孝をうしなつて、物語漢籍、佛典などを弄んでつれづれを慰めているうち、ふと長恨歌に興味をおぼえて「壺前裁」の物語を作つたのであらう。この論文に、折口信夫氏のお説をひいて言つてあるように、紫の上の死後の源氏の嘆き、これも一つの壺前裁で、或いは遠い昔にあつた天翔り去つた人の魂を、再び呼びもとすために、夜の前裁に向つ

て鎮魂をするという習俗が、この巻の帝が更衣の死後前裁に向つて歎きをするという場面を主題とする物語の構想を産み出したのであり、それはまた紫式部の亡夫をおもひ壺前裁の嘆きでもあつたのである。これは氏の説から啓發された私見にすぎぬが、右のように考へて來ると、第一段と第二段とはもとから一つづきとしてあつたのではないか。第一段がないと、第二段の帝の深い嘆きがわからないし、「長恨歌」の翻案も、第一段の冒頭からあらわれ來て來ている。「いづれの御時にか」云々からして、「長恨歌」の劈頭の「漢皇重色」云々の巧みな換骨奪胎であり、「上達部、上人などもあいなう目をそばめつつ」は、その「京師長吏爲是側目」から來てゐることなど、古註釋家の繰返えし言つてゐるとおりである。また、この段の瀕死の更衣の帝とお別れする時の歌「かぎりとして別るるみちの悲しきにかまほしきは命なりけり」は、「源氏物語」の數多い歌の中でも傑作の方で、決して第二段の六首の歌に負けない、哀切な深い思いがこもつてゐる。また第一段の文章がよく洗練されていて、恐ろしく聲調の美を發揮してゐることは、この物語の律調の研究に没頭してゐる渡邊榮氏や益本忠海氏らのひとしく指摘してゐる處である。ただ、第一段は第二段へのイントロダクションの役割をなしているために、プロットとしてみると、多くの事件の繼起的敘述とみえ、これに反して第二段は故更衣母邸に叔負の命婦の訪う場面と、帝の壺前裁の嘆きの場面の描寫になつてゐるところに、創作態度の變換が見られるが、それは第一段の終り近くに、更衣宮中退出の場面、更衣葬送の場面の短かい描寫があつて、その唐突に感じられない。引歌も、「なくては

かかる折にやと見えたり」など、うまいものである。それで、紫式部の「源氏物語」の初稿は、この第一段、第二段をふくむ物語で、それは「壺前裁」という短篇であつたと思ふ。

ところが、この短篇が友人間に評判がよく、續篇をせがまれて第三段を書いたのであらう。この段は源氏の生立ち、元服、結婚のことが書いてあり、その中に高麗人に人相を見てもらう條があり、そこに源氏の一生を豫言したところがあるから、この時は紫式部はもうこの物語を長篇とする決意をもつてゐたであらう。それとともにこの段の女主人公は藤壺で、その入内及び若き源氏の彼女にたいする思慕が描かれてゐるから、この段は多分もと「かがやく藤壺」とよばれたのだらうが、のち、「壺前裁」と一緒にされて、今の「桐壺」という巻名にされたのであらう。そう見ると定家の奥入のそれについての註の意味がよくわかるのである。桑原氏がこれを「桐壺」の異名とされたのは卓見で、私も從來そう考へていたのであるが、氏の論を讀んでゐるうちに、今のように考へた方がよりよく思われ出したのである。「奥入」に、(或る本の「桐壺」の巻が奥・端に分かれていたという説があるから、私見も必しも獨斷とは言えない。)

以上は桑原氏の論致のすぐれた點であるが、氏が、第三段を第二段と別人の手になるとする説は賛しえない。その一證とされる第三段の二首の歌の如き元服の日の帝と左大臣との唱和で、儀禮的な歌として堂々たる風格をもつてゐる。これが第二段の傷心の帝や故更衣母の歌のような深いリリシズムをもつていず、従つて人の胸をうたないのは當然だが、それは歌の詠まれた環境がちが

うからで、我々は却つてそこに紫式部の天才を感じるのである。尤も第三段が第一段よりもつと筋書風になつてゐるのは否めず特に藤壺の入内によつて、帝が故桐壺の更衣を忘れてゆく敘述は不快をあたえないではないが、それはこの世の現實であり、また第一段、第二段とこの段とが、違つた用意のもとに書かれただけの話で、これを別手にいずるとするほどのことはない。

もう一つ、氏のこの論の根本的な誤謬は、「桐壺」の語法を考へて、その成立を『今昔物語』以降に置こうとした點である。その語法の第一は「き」の用例についてである。氏は「き」を過去における自己の直接経験を現わす助動詞と解し、これを三人稱に用ゐるのは鎌倉時代の軍記物語あたりからとする。そして、「桐壺」に一箇處「き」を三人稱に用いた例があるのは、「は」はじめよりなべてのうへ宮仕へし給ふべき際にはあらざりき。」この巻が後代の筆たる證であるとす。しかし、山田孝雄氏の『奈良朝文法史』『平安朝文法史』を繙くまでもなく、『萬葉集』巻一の三山歌をはじめ「き」を三人稱に用いた例は幾らもある。まして、その活用形たるせ・し・しかにいたつては無數といつてよい。その上、この「き」の用例が『源氏物語』全體において九例しか見出されないうといふのは、その頻出する鎌倉時代より遙か以前の作たるを思わせる。第二に氏は「おぼゆ」を記憶するの意に用いたのは後代のことだから→母御息所はかげだにおぼえ給はぬに」とある「桐壺」の巻は、後人の作だと主張される。が、これも手近な「枕草子」などを見て、「古今の草子を御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、これが末はいかにと仰せらるるに、すべて夜晝心に

かかりておぼゆるもあるが、げによくおぼえず。……宰相の君ぞ十ばかり、それもおぼゆるかは」とある「おぼゆ」は皆記憶の意である。また第三に、この巻の結尾の「とぞいひつたへたるとなん」が『今昔物語』の各話の結びの「トナム語り傳へタルトヤ」に似ているから、前者の成立は後者の時代に近いとされるが、『竹取物語』も現存諸本いずれも「とぞいひ傳へたる」でおわつてゐる。従つて、紫式部當時物語の結びを「いひつたへたる」という風になつたのは一つもないとはいへない。なお、「桐壺」の巻が『源氏物語』の序巻として最初に書かれたにちがいないことは、前掲の拙稿「源氏物語成立攷」にも詳論した。また、この巻第二段の帝の故更衣母に遣わされた「みやぎ野」の御製が赤染衛門の歌の本據になつてゐること、それによつてこの巻が當時存在してゐたといふ外證がえられることは、近刊の『人文科學研究』に寄せた拙稿「赤染衛門私考」を参照されたい。

## 二、かがやく日の宮

「かがやく日の宮」といふのは、藤原定家の『奥入』の「空蟬」の終りの註文に初めて見えるもので、

(a) うつせみ二のならばとあれど、「帯木」の次なり。ならばとは見えず。

(b) 一説には、巻第二かがやく日の宮このまきなし(イこのならばの一ははき木。うつせみは、この巻にかはる。(イおくにこめたり。イこめたり)

とある(a)は「空蟬」が『源氏物語』の第二巻の「帯木」の并だと

いろが續きで并だとは見えないということである。定家は、并というのは、本巻と同時的事件を寫したものでないといけないと考えたらしい。たとえば「遷標」の并一の「蓬生」及び并二の「關屋」のごとくに。處で(b)一説によると、卷第二にも「かがやく日の宮」というのがあつて、その并一は「帶木」となつており、「空蟬」は「帶木」の奥にこめてあつたというのであらう。(そして多分「夕顔」が并二となつていたといふのであらう。)

ところで、これを重要視して「かがやく日の宮」の原存在を主張されたのは、玉上啄彌氏の「源語成立攷」(『國語、國文』昭和十五年四月號)である。玉上氏の「源語成立攷」は和辻哲郎氏の「源氏物語について」(『日本精神史研究』所收)の「源氏物語」「帶木」起筆説によつたものである。和辻氏は「帶木」の冒頭句から「原源氏物語」の存在を假定し、それに抗議する意味で、紫式部が「帶木」以下の今の源氏物語を書き「桐壺」はのちの書き添えだとされるのである。それには「河海抄」所引の一説「いにしへ源氏といふ物語あまたある中に、光源氏物語は紫式部が製作なりと云々」が考據とされておる。玉上氏はこの先行の「原源氏物語」をさきの「かがやく日の宮」にあて、「帶木」はこれを書き續いだとする。そして「かがやく日の宮」の内容は、女主人公藤壺が特に印象的に描かれているのは勿論だが、主人公光源君の當の相手として六條御息所を艶なる技巧をつくして口説き落すことが主位に置かれ、その他種々の姫君、花散里などとの色模様が出て來る。なお、正妻葵上とそばそばしい趣も述べていられたと想像する。そうすると、これは當時數限りなくあつた上品の戀の物語と

なるから、つくりごとめくので、紫式部は「帶木」以下にその中の戀を寫し、新機軸を出した結果、意外にもあの素晴らしい長篇小説となつたのであるが、讀者も「葵」「櫛」以降、六條御息所が直寫され「かがやく日の宮」の後日物語が發展してゆくと、ようやく紫式部の「光源氏物語」を「かがやく日の宮」から獨立して考へるようになり、作者また「玉鬘」の并十帖を書き終えた頃、發端「桐壺」を書き、これを「かがやく日の宮」の前に位置させたといふのである。それには彼女の保護者道長の意が大きく働いていたとする。

ところが「帶木」冒頭「光る源氏、名のみことごとしう、言ひけたれ給ふ咎多かなるに、……」(a)は、すでに私が説いたように、現存の「桐壺」の内容からみて、決して唐突でない。或いは「言ひけたれ給ふ咎多かなるに」がそう見えるのか知れないが、この冒頭の句は「光る源氏なんて、名だけはいたいへん仰々しくて實際は名にそわぬと非難される缺點が多くなるように」ということで、自己の創作の人物を實在化する手法にすぎぬ。それはこれにつづく文に「さるはいといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少將には笑はれ給ひけんかし」(b)そのくせ、たいへん世間を遠慮し眞面目ぶつていらつしやるものだから、風流で面白いことはなくて、あの交野少將にはお笑われなまるでしよう。(b)とあるように、當時流行の美男小説の主人公交野少將を實在化した同じ手法である。なお、(b)の「なよびかにをかしきことはなくて」は、自作への卑下で、この「光源氏物語」が、實は作者の創作であることを語つておる

(a)(b)の間に「いとどかかる好色事どもを末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さんと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ語り傳へけん人の物言ひさがなまよ」<sup>△</sup>その上、こゝういふ好色な行爲を後世にまで聞き傳えて、いよいよ浮薄な人間だといふ浮名を流そふかと、生前極秘にしておかれた内緒事まで語り傳えた世の人の口の悪いことよ<sup>△</sup>(c)といふ文があり、この巻から述べるのが、その主人公の極秘の戀愛事件であることをいつておる。(a)(c)(b)つづけて見れば、この文は、光源氏の生立ちを敘した「桐壺」をうけて、慇々その青年時代の戀の諸冒險を描かんとする「帶木」の序として、決前生後の名文ではないか。そして、この文のどこにも「原源氏物語」の存在や、それに對する作者の抗議めいた言葉など見られないではないか<sup>△</sup>拙稿「源氏物語成立私攷」<sup>△</sup>。和辻氏の提案が、この「帶木冒頭の文の誤解にもとづくことは、吉川理吉氏が「源氏物語評論の評論」<sup>△</sup>「國文學論叢」昭和二十六年五月刊<sup>△</sup>に語法上より説いていられる。ただ氏の解釋中、「咎」を容貌上の缺點をさすとされた點と、「さるは」<sup>△</sup>ソレガシカモ「かざし抄」<sup>△</sup>の逆態接續の意がハッキリ出ていないのはおしい。ここの咎は、戀愛、その他、倫理上の失行と解すべきである。(c)の「いとど」これは「かるびたる」にかかかる副語だが、(c)の語の存在が、その證とならう。

なお、右の文の「かかる好色事ども」といふのは、空蟬、夕顔ら中の品以下の女との戀愛事件であることは、「夕顔」の結びに「かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍び給ひしもいとほしくて、みなもらしとどめたるを」<sup>△</sup>など帝の御子ならんか

らに、見ん人さへかたはならず物ほめがちなる」と、つくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなん、あまり物言ひさがなき罪ざりどころなく」とあるのでわかる。昔の素性はともあれ、現在老伊豫介の妻である空蟬や、五條の陋巷に棲む夕顔との情事のごときは、當代の皇子である光君にとつては餘りに下世話な碎々しいことであり、彼の生涯きわめて秘密にしていたことで、作者も氣の毒に思い前巻には皆書かないでおいたというから、若し「かがやく日の宮」といふ物語があつたとしたら、それは先行の獨立した物語ではなく、「奥入」にいうように「帶木」の前に位置すべき「源氏物語」の一巻で、この作者の筆になるものにならざるべきであらうと考へるのである。そこでは光君がそれこそ超人的な美と才藝の權化として描かれ、またその將來の戀人たる藤壺<sup>△</sup>「見む人」は、作者ではなくて、將來の愛人といふこと<sup>△</sup>をまで、この世ならず美しく描いており、現在の讀者である我々にさえ「つくりごとめ」いて感じられるからである。<sup>△</sup>拙稿「源氏物語成立私攷」參照<sup>△</sup>

處が「源氏物語の最初の形態」(『文學』昭和二十五年六・七月)を發表して、學界に一波紋をおこさせられた武田宗俊氏は、「帶木」空蟬「夕顔」を後記とする立場から、そのかわりにここにも「かがやく日の宮」の巻があつたとし、それが「桐壺」と「若紫」との橋渡しをしていたと考えられた。氏は通説に従つて「源氏物語」を、第一部「桐壺」——「藤の末葉」、第二部「若紫」——「幻」、第三部「匂宮」——「夢の浮橋」にわけ、更に第一部の卷々の成立を二段階にわけて、獨自な見解を示された。すなわち、第一部の卷々は、本筋と副筋にわかれ、本筋の方は光源氏と藤壺紫上・明石上との戀に、葵上・六條御息所・朧月夜尙侍・花散里・横齋院らと彼との關係をからませたもので、長篇的結構をもつてゐるに反して、副筋の方は短篇的な説話をつらねて、空蟬・夕顔・未摘花・玉鬘らと彼との戀愛事件を描いており、各説話は一見ばらばらのようだが、その源は一つで、「帶木」の雨夜の品定に出で相關連して一の統一をもつておる。今便宜上、前の長篇的物語を特に重要な女主人公によつて紫上系の物語と名づけ、後者を玉鬘系の物語というとして、前者は綺麗事づくめで、いかにも「つくりごと」めくから、作者が嫌らず思つて、この主人公の性格に深みを與へこの物語をよりリアリティクに深刻にするために、「藤の末葉」を書いたのちに、後者を書き、今の位置に挿入したといふのである。そう見ると、前述の如く、紫上系の物語で出来てゐた「源氏物語」では、「桐壺」と「若紫」とのつづきが悪いから、ここにも「かがやく日の宮」の巻があつたとするのである。

この武田氏の新説は、秋山虔氏の「源氏物語」(河出書房)「日

本文學講座」(Ⅱ)によつてそのまま、池田龜鑑氏の「新講源氏物語」によつて多少批判的な形で受け容れられ、學界の定説とならうとしてゐる。その凄まじい勢いは、往年の紫式部寛弘四年宮仕説以上である。特に「輝く日の宮」の巻の存在については、武田氏は「源氏物語紅梅の巻の位置と輝く日の宮の巻」(『國語と國文學』昭和二十六年九月號)において、池田氏は「新講源氏物語」において詳論してゐられる。尤も池田氏はこの巻がもと「源氏物語」の首巻であつて、「若紫」の前にあつたとし、「藤末葉」以後に「桐壺」が發端として書かれた時にこれにかわつたか、脱落したかとする。「帶木」——「夕顔」をのちの挿入とするのは、武田氏と同じであるが、その挿入の時期を「乙女」執筆前後とし、「帶木」の巻が「かがやく日の宮」をうけて書かれてゐるとする點がちがうのである。

ところで、「かがやく日の宮」の内容は、玉上氏・武田氏・池田氏ともに變るところがない。今それをいちばん巧みにまとめられた池田氏の「かがやく日の宮」(『平安文學研究』昭和二十五年十一月)によると、「十七歳の近衛中將を主人公として、光の君とか源氏の中將とか呼ばれてゐる……この主人公が左大臣の姫君である妻とうまく行かず、亡母によく似てゐるといふ美しい女御と、一夜のちぎりをかわす、六條にすむ前春宮の未亡人にかよひはじめ、それが宮中の評判になる。そんな話を中心で、そのほかに、式部卿の姫君に、朝顔につけて歌をおくつたり、豊明の節節のおりに舞姫に歌を詠みかけたり、豊景殿女御の妹の三の君にいいよつたりすることも書かれてゐる。」とある。しかし、こ



こに書かれている位のは、今の『源氏物語』ですつかり想像  
できることではないか。またこれを克明に物語るとすると、「亡母  
によく似ている美しい女御」に思いをかけるだけでも、「桐壺」の  
一卷、或いはその第三段ぐらいいはいるのだから、これらすべての  
事件を描けば、それこそ幾巻も要することになる。それに源氏の  
これら上臈との幼な戀を書かなかつたのは、夕霧の雲井雁や五節  
の舞姫であつた藤典侍とのそれに譲つたのである。式部卿の姫君  
に朝顔につけて歌を贈つたことが、空蟬の侍女の噂話として語ら  
れていただけであつたればこそ「權」の巻で、晩秋の枯れた花に  
まじつたあるかなきかの朝顔に「見し折の露忘れぬ權の花の盛  
りは過ぎやしぬらん」という歌を實際に贈るところを直寫してい  
るのである。花散里が同名の巻の初出の人物であることは、それ  
を訪う通りすがりに、これまで出たことのない女の家をおとのう  
てみたり、またこれも今まで現われなかつた人物である五節のろ  
うたげであつたけはいを憶い出しているのでもわかる。(この五節  
のろうたげなけはいの實際の描寫は「須磨」の巻にあり、「乙女」  
の巻の夕霧と藤典侍との戀を見て、彼はこの五節を思い出して  
る。)従つて「輝く日の宮」の巻は、内容上からはいらぬ巻である  
殊に「桐壺」の構想が「須磨」で出来ていたことは、同巻末近く  
で、明石入道が妻に源氏の素性・生立ちを語る處で明らかである  
ところが「須磨」「明石」の構想が「若紫」においてすでに出来て  
いたのは周知のとおりであり、一方「若紫」には源氏の藤壺にた  
いする愛、及び藤壺のゆかりとして紫の姫君を北山に見出し、こ  
れを二條院に引き取ることが書いてあるのだから、彼が藤壺を思

慕する原因となつた亡母桐壺の更衣の物語が、これに先行せねば  
ならぬ。そうすると「桐壺」の巻が最初に書かれていねばならぬ  
こととなる。若紫を迎える二條院もこの巻で用意されている。

また、武田氏・池田氏らの「帚木」後記説によると、この巻は  
「輝く日の宮」のあとをうけるように構想されているはずである  
が「帚木」冒頭の序(既述の a b c)の直後に、「まだ中將など  
も、のし給ひし時は内裏にのみ侍ひようし給ひて、おほい殿には絶  
え絶えまかんで給ふを、しのぶのみだれやと疑ひ聞ゆることもあ  
りしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきさな  
どは、好ましからぬ御本性にて、稀にはあながちに引きたがへ、  
心づくしなることを御心に思しとどむる癖あやにくて、さるまじ  
き御ふるまひもうちまじりける」(d)とあるのは、氏らの示す「か  
がやく日の宮」と非常に矛盾して来る。すなわち、池田氏説によ  
れば「かがやく日の宮」の光源氏は近衛中將であつたはずである  
が、それをうけた「帚木」が「まだ中將などにもし給ひし時は  
云々」というと、もとへ歸つた形になり、「帚木」こそ「輝く日の  
宮」に先行したといわねばならぬこととなる。しかも、「帚木」の  
主要部分である雨夜の品定は宮中でのことで、彼の本傳に屬すべ  
きことだからである。「帚木」後部の空蟬の件は後記と考えてよ  
いとしても)光源氏の中將任官は何歳の時か分らぬが、薫のそれ  
が十四歳で元服した秋である(「匂宮」)ところを見ると、源氏も十  
二歳で元服してまもなくであつたろうから「かがやく日の宮」に  
おける源氏の官を中將とした池田氏の假定は正しい。それに拘ら  
ず、「帚木」の「まだ中將などにもし給ひし時は」を活かそうと

するなら、前者の巻では光君の中將任官以前のことか記してあつたとしなければならぬが、そうすると、今の「桐壺」或いはその第三段となつてしまふ。また無理に池田氏らのいう内容をもつ「かがやく日の宮」の存在を假定しようとするれば、その巻の光源氏は少くも大將に昇進していねばならぬ。すなわち彼の二十一歳以後の物語「葵」「櫛」「花散里」と同時か同じ事件が描かれていねばならぬこととなり、この巻が最初「若紫」に先行するものとして書かれたとする假定にひどく矛盾して来るのである。また(d)の「忍ぶのみだれやと疑い聞ゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは、好ましがらぬ御本性にて、稀には」とある記述と、池田氏らの想像される「輝く日の宮」の源氏の多角多様な戀愛行動とは根本的に矛盾すると思ふ。例えば六條御息所との戀愛が「宮中の評判」になつていたらそれこそ「忍ぶのみだれや」との疑いどころではあるまいし、その他に櫛や五節や花散里にまで言い寄つていたとしたら、「さしもあだめき目馴れたるうちつけの好色々々しさなどは好ましからぬ御本性にて、稀には」とは言えまい。また、これらが池田氏のいわれるように十七歳に起つたとして、その上に同一年に空蟬・軒端萩・夕顔らとの戀愛事件を添加しようとする作者が、こんなしらじらしい序をくつつけるはずがないではないか。思うに、五節花散里らの著想は、「須磨」直前に出来たことで、源氏と彼女らとの交渉は必しも彼の十七歳以前と限定する必要がないのである。また、櫛と彼との戀愛を一つのテーマとして物語として取り上げようと作者が決意したのは、「葵」「櫛」の巻で、六條御息所を齋宮

の母女御として、野宮を背景とする戀愛シーンを描いた對照に、「帚木」に空蟬の侍女の噂話として出た櫛を大きくクローズ・アップして来て、これを齋院とし、光源氏と齋院との戀愛物語を構想したのである。また「櫛」にある六條御息所の經歷に見える前東宮の年立が、「桐壺」の一の宮立坊の年立と矛盾するのも、「桐壺」が書かれる時に六條御息所のことを考えていなかつたからでありそれは「輝く日の宮」の巻の存在しなかつたことも傍證する。それに拘らず、後者の存在を強説しようとするれば、その内容は藤壺との戀愛の發端だけとなり、今の「桐壺」の第三段程度の筋になつてしまふのである。(序に池田氏が「今の發端の巻としての桐壺の巻に、源氏の出生や、その母更衣のことをのべてゐるのは、藤壺(紫の上)物語の構想圏内においては無意味である。」「新講源氏物語」上)と言われるのは不善である。それは、この藤壺・紫上物語の主人公はやはり源氏であり、この源氏が藤壺・紫上を思慕するに到るのは、その出生の由來、及びその母更衣の薄倅な蚤死によるからである。)

私は「桐壺」の次に「帚木」が書かれたものと思惟するのであるが、その理由として(1)冒頭の序が前者にうけるにふさわしい。尤も武田氏は「まだ中將などに物し給ひし時は」は、紫上系の物語を前提にしないとおかしいといわれるが、作者は「桐壺」及び「帚木」の(a)(c)において、光源氏を過去の高名な實在の人物扱いにしているのだから、そんな前提がなくてもよいのである(2)「帚木」の序に書かれた光源氏の性格は、「桐壺」に見える彼のマザー・コンプレックスの深化としても、また好色な帝と、不必

要なまで世間を氣にする更衣との子としての遺傳だとしても、自然にうけ取られる。(3)「桐壺」及び「帚木」における彼の藤壺への思慕が感傷愛にとどまつてい、彼の實際の性対象として空蟬・夕顔がえらばれるのは、貴族のマザー・ユムブレッタスにともなりサブント・コンブレッタスの發現として自然である。私が繰返して説いたように、光源氏が正常な妻を愛しえず、繼母藤壺を感傷的に思慕し、その性代償として、前東宮妃・空蟬・夕顔のごとき年上の寡婦・未亡人をえらんだのは、この母錯綜のためであり、それが若紫にまで筋をひいているのである。へなな、源氏が紫上の死後、もはや明石上らをさえ妻と愛しえず、故妾上の侍女の中將によつて孤閨の寂しさを慰めているのは、その幼兒的サーヴント・コンブレッタスへの退行をいみじくもあらわしている。(4)「忍ぶのみだれや」の語は、『伊勢物語』の初段の「春日野の若紫の摺り衣忍ぶのみだれ限り知られず」を出典としており、そのことは後者が昔男の初冠後の最初のアヴンチュールを敘したのことに對し、前者(「帚木」)が光源氏のそれを描こうとしていることを豫示している。(5)最後に、これが最も決定的な内部徴證であるが、この巻及びこれに續く「空蟬」の巻に、惟光が出て來ないことである。惟光は紫上系でも「若紫」以後に活躍し、光源氏の近侍として、その極秘にすべき私生活に重要な役割をつとめている。彼の忍びあるきにはいつもこの男がお伴をし、のち參議となり、その女の藤原典侍は夕霧の妾となつてゐる。ところが、彼の素性は紫上系の巻々の何處にも語られていぬ。これは源氏のさしつぎの侍臣源良清が「若紫」に初出とともにその素性が語られているの

に對して非常に對照的だ。もし「輝く日の宮」の既存を假定してその中に惟光が出て來たとしたら、源氏は再三の空蟬の宿への忍びあるきに、彼を伴なつたであらうし、小君のごとき少年をその相談相手にする必要はなかつたらう。その必要があつたのは、惟光を構想していなかつたからで、このことは六條御息所の出來る「輝く日の宮」及び紫系の巻々の「帚木」「空蟬」以前の存在をはずり否定する。一體、惟光の初出は「夕顔」で、そこには彼が源氏の乳母の子であることが述べられており、それによつて彼が夕顔の死骸の始末をしたり、若紫を盗み出す手傳いをするようである。「夕顔」の巻が先行しないと、「若紫」における彼の行動が説明されぬ。また、「若紫」の冒頭の「瘧病にわづらひ給ひて」は、「夕顔」をうけるものとして、決して唐突ではない。瘧病は瘧鬼のことで、『箋注倭名類聚抄』「神靈に」「獨斷」二卷、漢蔡邕撰原書作「疫神。帝顛項有三子、生而亡去爲鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、其一者居若水、是爲癘鬼、其一者居二宮室極隅處「善驚小兒」とある。すなわち、光源氏は「夕顔」の某院——それは古註にいう河原院であらう——の物怪にあり、「わらはやみ」になつたのである。

### 三、玉鬘系後記説

敘上の論述を虚心平氣に讀まれば、武田氏は玉鬘系の巻々の後記説を撤回されると思ふが、なお疑問が残るかも知れないから氏の立論の諸根據について左にざつと私見を述べてみよう。

さて氏の「原源氏物語」とする紫上系の巻々は「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「花宴」「葵」「櫛」「花散里」「須磨」「明石」「滯標」「繪合」「松風」「薄雲」「蘆」「乙女」「梅枝」「藤末葉」の十七帖、後添とする玉鬘系の巻々は「帚木」「空蟬」「未摘花」「蓬生」「關屋」「玉鬘」「初音」「胡蝶」「螢」「常夏」「篝火」「野分」「行幸」「藤袴」「眞木柱」の十六帖である。ところで、玉鬘系を後記すると、紫上系にその影響がないはずだが、それが二三ある。武田氏に従えばその(1)は「葵」の源氏が葵上の死を悲しむところに、

常のことなれど、人ひとりかあまたしも見給はぬことなればにや、たぐひなく思しこがれたり。

とある。この一人、人は、古註のいうとおり夕顔で、語感からいつても、場合からいつても、三歳の時の母の死、六歳の時の祖母の死の記憶の復活とは思えぬ。六歳の場合は當時物心があつたとしても、その印象が永續するとはおほえぬ。今、記憶にかすかに再生したとしても、それは「あまたしも見給はぬことなればにや」という漠とした表現にふくまれてしまふ。それ故、この一句を氏が後人の添加と見るのは強辯であろう。(2)は、同巻の

かのいさよひのさやかにし秋のことなど、さらぬもさまさまのすきごとども交みにくまなくいひあらはし給ひて、

で、葵上の死後、光源氏と頭中将が好色の老典侍をはさんでの鞍當時件を回想して雑談する條の地の文、古註いづれも「未摘花」において、十六夜に源氏が常陸宮邸にいまみにしので行つたのを頭中将に尾行され、その輕擧を戒められた件をさすとしている。ところがその夜は春だつたので、ここに秋とあるのがおかし

くなるのである。が、この秋は多分一本にある夜の誤寫だと思ふ。そうみると、「さやかにし」は、頭中将に「ハッキリ見あらわされたいさよひの夜のこと」となり、おかしくないのである。當時源氏は春の朧月夜にまぎれて忍んで行くつもりであつたが、その夜は生憎「里わかぬかげ」が著かつたのである。この一句また後人の補入と斷ずるのは、自分の都合のよい處を削るので、公正とは言えぬ。(3)惟光・権齋院等兩系共通の人物の存在は、玉鬘系後記説の重大な障害となる。これに對する武田氏の見解は、自説を固持するため混亂に落ちてゐる。例えば、源氏がこの姫君に朝顔を奉つたことは「帚木」に空蟬の侍女たちの噂話として出てゐるためだけなので、「蘆」の巻で源氏が實際にそれを贈る場面を、稍々趣きをかえて直寫するのである。こういう場面の直寫の繰返えしが二度あつたら、現在でも變だといふ武田氏には、一層變に感じられるはずではないか。但し、右近尉については、「葵」「須磨」「滯標」の巻では別に作者は伊豫介の子とするつもりがなかつたが、「關屋」でそうしたのは、小君の後日物語を書くためであつた。しかし、この事は、何も玉鬘系後記説の有力な證據にはならぬ。なお「帚木」「空蟬」「夕顔」の事件や人物が紫上系の巻々に出ないのは當然で、これは光源氏の極秘の密事だからで、そのことは作者は、あらかじめ「夕顔」の結末で斷つてゐる。ただ夕顔が「玉鬘」の巻で大きく回顧されて來る理由は、この夕顔の物語が當時の讀者に甚深の感興を起したからで、東院や六條院が建てられて、源氏が若い日に交渉をもつた女たちをそれぞれに棲ませるとなると、蚤死した夕顔をそのままにするに忍びず、その遺兒

玉璽を六條院に引き取る構想をしたのである。(夕顔と同じ型の女性である「宇治十帖」の浮舟や、『狭衣』の鵜島井姫の投身事件とその後日物語とを比較して見よ。)

次に武田氏が玉璽系後記説の積極的證據とされるところをあげてみると、(1)『紫式部日記』寛弘五六七年の日記に出て来る少將の君と夕顔との性格の類似で、前者が後者のモデルと見られる點だが、これはどうであろう。あえかにこめかしいは、たしかに兩者の性格に通じるが、物づつみの點は少將の君の方がつよく、夕顔はとおりがかりの光君に歌をおくるような下世話に碎けた處があり、それで五條の陋巷にも棲めるので、前者ならその前に「身をも失ひつべく」思ひ入つてしまおう。また、少將の不幸は、「人の程よりは幸のこよなくおくれ」ているだけで、紫式部よりは上臈の女房だから、彼女はその言をなす前に「我が身によせてには侍らず」と斷つてゐる。父が早世したことは、兩者通ずるが、少將の君と夕顔とでは身分、境遇がちがう上に、前者は後者の環境では生きえぬ人である。ただ、紫式部はこういう、あてにあえかな女性を好んでいたことは確かで、桐壺の更衣・臘月夜尙侍・女三宮・宇治の大君・浮舟などがそれであり、少將の君は彼女の同性愛の對象であつた。しかし、少將の君には對異性關係に浮華な點がなかつたことは、夕顔とはちがう。なお、同日記寛弘五年十二月晦日の夜のひきはぎ事件と「夕顔」の某院の變死事件と語句に類似が見えるが、これは當時の女房の語彙が貧弱であつたために、こういろいろむくつけき事件を描くと、同じ語彙が頻出するだけのことである。しかし、事件としては一方は廢

院の物怪事件であるし、他方は内裏の中宮御所における強盜事件であつて非常に趣きがちがつていて、(例えば後者には事件後のエモアがある)一を他のモデルとは言えぬ。これについては島津久基氏以來の誤解があるが、別稿「少將の君の履歷と夕顔の性格」に詳説する。とにかく紫式部は彼女の最も愛していたあのあてにあえかな少將の君に、こんな五條の陋巷のうらぶれた生活をさせ、はては廢院の物の怪に取り殺させてしまうようなことは、その死後は勿論、生前にだつてするはずがない。

(2)池田氏、武田氏の「帚木」の冒頭、及び「夕顔」の結末の句から、玉璽系後記説を立てようとする論は、この兩文の誤釋から出發しているのだから、その正しい解釋を與えれば消失するはずだが、それは私が前節にしておいたから、武田氏の前掲論文の下にあるものと比較して、嚴密に語法上から可否を批判してほしい(3)武田氏は(2)から進んで、玉璽系の卷々の序は修飾型で、紫上系の卷々の序は即事型といわれる。が、例外として前者から「初音」後者の「桐壺」(「何れの御時にか」は、古註によれば「伊勢集」冒頭の語を典據としてゐる)、「花散里」があげられる。「初音」は武田氏は修飾型としてゐるが、それは

年立ちかへる朝の空のけしき名残りなく曇らぬうららげさとはいうので、元旦の天氣の描寫で、後文の修飾ではなく、明らか

に即事型であり、「花散里」の冒頭の、  
人知れぬ御心づからの物思はしきは、いつと無きことなせめ  
れど、かく大方の世につけてさへ煩はしう思し亂るることのみ  
まされば、物心ほそく、世の中なべて厭はしう思しならるるに

さすがなること多かり。

は、後文の麗景殿の妹三の君を出すための序で明らかに修飾型である。これが修飾型でないとすると、氏のそれとしてあげられた玉鬘系の「末摘花」の冒頭「思へどもなほあかざりし夕顔のつゆに後れし程の心地を」、「玉鬘」の「年月隔りぬれどあかざりし夕顔をつゆ忘れ給はず」など、いづれも即事型といわねばならぬ。ただその内容として、玉鬘系のは主人公の追憶や、もしくは物語の時間が進行する場合が多く、紫上系のは物語の時間の連続している趣が見えるが、これは前者が副筋的・挿話的・短篇的性質をもち、後者が主筋的・本傳的(或いは日記的)長篇的性質をもつからである。それ故、例外として紫上系でも首巻の「桐壺」の冒頭は回想的であり、短篇的な「花散里」は修飾型の書き起しを見るのである。また玉鬘系でも「初音」は、「玉鬘」——「眞木柱」十帖の中の第二帖にあつて、長篇中の一巻たる性格をもつから、即事型なのである。(4)更に武田氏は、紫上系の巻々の巻尾と、玉鬘系の巻尾との間に、直接話法と間接話法とのちがいがあり、後者には「とぞ」とや「となん」等の語があるといつておられるがこれは厳密に現存源氏諸本の異文を比較してからないと言えず、現に武田氏のあげていられる例でも、自説に都合よいように青表紙系、河内本系を取捨していられる。しかし、だいたい傾向として氏のいわれる特徴があることは確かだが、それは玉鬘系の巻々のさきに言つた副筋的、挿話的、短篇的の性格によるのである。そうかといつて、それを紫上系の巻々の後記というのは、物語構成の手法を知らぬ者の言い方であり、また既述のことく、これら副

筋にも陰に主筋發展のモメントがはたらいており、これを除くと主筋における時間、事件、人物の連鎖が断ち切れよう。

(これは逆の場合、すなわち武田氏の主張される玉鬘系後添のため生じた、主筋の談話の中断、時間の逆行によつて生ずる外見的混乱と比較にならぬ。時間の逆行は巻を別にするることによつて防がれ、説話の中断は讀者の期待を強めて、長篇物語的効果を増し、外見的混乱は内面的統一に深化される。「帚木」後添説の一つたる雨夜の品定の思想的深さなどは俗見で、あれは男子の女性観で、上下の階級の女性より中流の女性に個性が多いの、妻としては温良貞淑な女性がよいのと、紫式部本来の女性観からみれば甘いもので、彼女はこういう女性観を輕侮しているのだ。そして上臈、下臈の女性たちのそんなモラルでは律せられない、性格的な悲劇を紫上系の巻々で展開しているのである。その他「夕顔」におけるような構想上の破綻も後の巻々には見えない。紫上系と玉鬘系の巻における人物呼稱の相違は、本傳とゴシップにおける相違である。)

なお、武田氏は玉鬘系後記説の最も重要な證據として六箇條をあげておられるが、そのうち(一)は頭中將が源氏の有夫の老源典侍と密會の現場を見つけた時の心地で、「末摘花」の場合のように、孤獨の姫宮の琴を立ち聞きして歸る源氏を尾行して怨んだのとはちがうのである。(三)源氏は夕顔の廢院の死でも懲りているが、それは宮廷外の事件である。處が今度は豫期しなかつた宮中における輦當事件であるから「あやしのごとどもや」云々と反省したのである。こういう悪性は、一回や二回危難にあつても、な

かなかやむものでなく、こんどは大丈夫と思いつつ、また失敗してくやむのが例である。(四)(五)(六)源氏が「いふかひなき際の人はまだ見ず(権)」といっておるのに、末摘花はどうだというのが、それなら紫上系の源典侍はどうだといいたい。源典侍がすきもので、いうかいがあるなら、末摘花だつて人柄として浮華でなく貞淑なよい女である。殊に彼女の草子學問や琴の趣味は、そう莫迦にしないでよい。ただ當世男の源氏にむかえると、おかしというだけである。問題は、ただ(一)だけである。「若紫」で源氏が北山にゆき、咒いの後、そぞろ歩きして、若紫をかいまみた處、

あはれなることどもをも見つるかな。かかれはこのすきものどもは、かかる歩きををのみしてよくさるまじき人を見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なる事を見るよとをかしう思さる。

私はこれこそ「帯木」の雨夜の品定が先行した最もよい證據だと思ふのだが、武田氏はすでに源氏が方違えや病氣見舞の途上、空蟬や夕顔を見出しあとではおかしといわれる。が、空蟬や夕顔は年上の寡婦で、決して彼が一生を踏して悔いない女性ではない。空蟬との關係は彼女のつれなさとの心くらべに長びいただけだし夕顔はあつけない變死を遂げたから、その可憐な印象が永く彼の心に残つただけである。處が、若紫は、彼の心の最深奥にある愛人藤笠の生き寫しの少女である。その人をはじめてかいまみて、それが思ひがけないこんな山の僧房で、たまたまの外出においてであつたから、そのよろこびをこういつたのである。空蟬の場合

は、雨夜の品定の直後で、期待された發見であり、夕顔の場合は彼女から挑んでいる。彼自身が意外な場所と場合に、眞に完全に理想的な少女をみつけたのはこれがはじめて、つくづくと雨夜の品定で語られたこの道の粹人たちの經驗談が思い當つたのである。なお、一箇處それは「梅枝」の

御贈物に自の御料の直衣御よそひ一領、手ふれ給はぬ薰物二壺そへて御車に牽らせ給ふ。宮、

花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりと妹や咎めむ

とあれば、「いと屈したりや」と笑ひ給ふ。御車かくる程に追ひて

めづらしとふる里人も待ちぞ見む花の錦をきて歸る君を捉えて、武田氏はこの宮は螢で、その夫人は、先行の玉鬘系の「胡蝶」に、三年前に死に、宮は獨住みでいたとあるに矛盾するといわれる。しかし、この贈答は、六條院の薰物合に宮が判者をつとめて祿をうけて歸る際の、主人源氏との贈答で、機智を主としたものである。故北の方在中さえ他に愛人のあつた、好色な宮が表向獨住みでおられても、その邸内に、ひそかに愛情をかけたいられるひとないはずがない。そう思つてみると、「いとくしたりや」という源氏の言葉も利いて來、答歌も失禮に當らない。玉鬘が髻黒に嫁して子まで産んだあとだから、宮も氣易くこんな戲談を言われたのであり、源氏がそれをわざと眞にうけた處にエーモアがあるのである。

ところで、武田氏の説に従つて、玉鬘系の「玉鬘」以下十帖を

取り除くと、紫上系の「乙女」と「梅枝」に三年の空白が出来るが「梅が枝」のはじめに、その事が断わつてない。「桐壺」「帯木」間の四年の空間は、「帯木」のはじめに「まだ中将などに物し給ひし時は」の語で、それが省略されたものであることが明示され、「若葉」下の四年の空間は「はかなく年月もかさなりて」の語でその省略が断わつてあるから、いずれも話の筋はよくとおつてゐる。ところが「梅枝」の冒頭にはそれが断わつてないから、「乙女」からの話の筋がつかない。そこで、武田氏は伊行の「源氏釋」にある「櫻人」をもつて、この十帖にかえようとするのだがその「櫻人」には註文によると、第九條に「夕顔の御手のいとあはれなれば、跡はちとせも云々」とあつて、夕顔が出て来るのでやはり玉鬘系の巻の一つとなり、「玉鬘」十帖後記説の支柱とはなりえぬのである。従つて、武田氏の玉鬘系の巻々後記説は完全に崩壊し、「源氏物語」の第一部は現在のままの巻序で書かれたことになるのである。それとともに「玉鬘」十帖は紫上系に入り、「源氏物語」の本筋をなし、玉鬘系の巻々という呼稱も意味が變わるのである。なお「櫻人」については堀部正三氏の『中古日本文學の研究』に詳しい紹介があるが、池田氏の『新講源氏物語』にこれについての一層徹底した精緻な批判が見えている。すなわち、伊行の釋はもと彼所持の『源氏物語』の傍註、頭註を集めたもので、「櫻人」はもと伊行所持の『源氏物語』の「眞木柱」の次にあつたものだが、伊行釋の編集者は「この巻はある本もあり、なくともありぬべし。ほたるが次にあるべし」という浮動的なものでこの釋をみたはずの定家も問題にせず、河内系の學者も無視して

いる。従つて後人の偽作で、或いは擬作すきな伊行の所爲だらうというお説で、私も賛成である。ただこれが後人の擬作である證據を一つあげると、光源氏が夕顔の手蹟をえてなつかしむところは「狭衣」の大將が故飛鳥井姬の形見をえて懐舊の情にたえぬ條と似ているので、前者は後者を模して作つたのではないかと思ふこの巻が源氏の玉鬘にたいする戀情を主題としたものとする、同名の催馬樂の歌詞によつて知られるように相當猥雑でなかつたかと思ふ。

#### 四、「竹河」の否定と「紅梅」の位置

武田氏の今一つの重要な提案に「源氏物語竹河の巻について——その紫式部の作であり得ないことに就いて」（『國語と國文學』昭和廿四年八月號）があるが、氏は「考異源氏物語」について、その本文を語法、修辭上の缺陷からこれを論じておる。そして紫式部をそういう缺陷のない名文家だと先断している。かつ、吉川理吉氏が言われるように、氏の語法的解釋は不十分である。また、小少將夕顔モデル説では「夕顔」の某院の事件と「日記」のひきはぎ事件の文の語彙の一致に立脚しているのに、「初音」と「竹河」の踏歌の記事の語彙の一致では、兩卷の作者の同一人にあらざる證としてゐる。氏の本文比較の根本的な弱點は、同を見ても異を見ざるにある。その結果「竹取物語」と「宇津保物語」の作者を同一人だなどと臆断するにいたる。氏の根據の唯一の強みは、この巻で夕霧が左大臣に紅梅が右大臣に墮つてゐるのに、「紅梅」及び「宇治十帖」で、なお前者が右大臣、後者が大納言にと



ことだが、これは物語における人物の呼稱が混亂しないように、長く在官した前官名で統一したのである。「寄生」の藤大納言右大將兼官は、傳阿佛尼本に「右大將の左になりてかへ給へる所なりけり」とあつて、別に「竹河」と矛盾しない。若し原作が流布本の如くであるとしても、それは紫式部の記憶がいで、戯作者はこんな處で馬脚をあらわさない。また夕霧、紅梅が長く右大臣、大納言にとどまつたとは思えぬ。「竹河」は玉璽の鸞黑後後の不如意を描いて、かいなでの作者の及ばぬ深刻なりアリストテイクな境地にいたつている。「竹河」が原作にあつたとすれば、「紅梅」の位置は、早く山脇毅氏が説かれたように「竹河」の前にあらねばならぬ。《源氏物語の文獻學的研究》これを「早蕨」の後に置くうとしたり、抹殺したりするは、まだ速断であると思う。

いつたい、「竹河」の巻を後人の擬作とする説は、左のこの巻冒頭の文にたいする與謝野晶子氏・小林榮子氏らの誤解から發している。

これは源氏の御族にも離れ給へりし後の大殿（はらのとほ）あたり（あた）にありける悪後達（あくごたち）の落ちとまれるが間は（ま）語り置きたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひがごとどもの交じりて聞ゆるは、我よりも年の數つもり呆けたる人の僻言（ひがや）にや」など怪しがりける。いづれかはまことならむ。

の「紫のゆかりにも似ざめれど」という語を、「紫式部の筆には似ないだらうけれども」と解し、これをこの巻、或いはこの巻を含む「若紫」以後の物語（與謝野氏）、または「勾宮」以降の巻々（小

林氏）を紫式部以外の人の手になつた證とされる。武田氏は、紫のゆかりは藤壺の縁者紫の上の意が「末摘花」「若菜」等の原義であるが、それはまた紫の上系の物語をさす意にも轉用されたとし、「更級日記」の用語例をも参照していられる。そして、「竹河」の巻だけが、紫式部の筆でないことをいつておるとされる。なるほど、紫のゆかりの語の正篇の用語例の本義は藤壺の縁りの意だが、紫の上の殆後の續篇では、それを紫の上のゆかりと解し、本居宜長の「玉の小櫛」のように、それを紫の上の女房の話に取つて差支えないと思う。《更級日記》のも、「源氏物語」を女主人公の名で「紫の物語」といい、そのつづきの一部分を「紫のゆかり」と呼んだのである。そう見れば、紫の上の侍女たちが玉璽の侍女たちより「年つもり呆けていたこともわかり」「源氏の御末々にひがごとどもの交じりて聞ゆるは」は冷泉院の物のまぎれをさし、冷泉院に女を奉つた玉璽の侍女がこれを打ち消すのも當然となる。この文はまた作者が正篇の物語を紫の上の侍女にえたとする老巧な責任轉嫁で、それは「掃木」の序「夕顔」の結びと揆を一にする。「紫のゆかりにも似ざめれど」は、この「竹河」の玉璽後日物語の讀者の豫想に反して、現實的で面白くないことを斷つたものであり、「いづれかはまことならむ」は、この玉璽の侍女の言も眞偽保證の限りでないことをいつたまでである。従つて、この「竹河」の序の解釋は宜長の説がよく、いかにも紫式部らしい筆で、他人の作とは思えぬのである。右率直に私見を述べたが、識者の叱正を仰いで、蒙を辱くをえば幸甚である。